

聖書：マタイ 19：27～20：16

説教題：後の者が先になり

日時：2020年1月12日（朝拝）

今日の箇所は19章27節のペテロの問いから始まります。ペテロはイエス様にこう問いました。「ご覧ください。私たちはすべてを捨てて、あなたに従って来ました。それで、私たちは何をいただけるでしょうか。」これは前回の金持ちの青年に対するイエス様の21節の言葉に基づいた問いです。イエス様はそこで「あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」と言われました。ペテロたちはお金持ちではありませんでしたが、それでも自分たちにとって大事なものを後ろに捨てて従って来ました。4章20節で、イエス様から「わたしについて来なさい」と言われた時、ペテロとアンデレはガリラヤ湖で網を打っていましたが、それらを捨ててイエス様に従いました。その後の22節にもヤコブと兄弟ヨハネが同じくイエス様からの招きを受けて、「すぐに舟と父親を残してイエスに従った」と記されています。この福音書を書いたマタイもそうです。9章9節に記されていましたが、取税人としてお金を生きがいとしていた彼がイエス様からの招きを受けてすぐに立ち上がって従いました。高収入が約束されている美味しい仕事を彼は捨てたのです。それはイエス様に従うことの方がはるかに自分にとって価値あることだと彼が判断したからに他なりません。これらはまさに26節の「神にはできる」という御言葉の例証です。

ペテロはその事実に触れながら、そんな私たちは何がいただけるでしょうかと問います。一見大人げない、子どもじみた質問のようにも聞こえますが、率直な質問、素朴な問いだったのでしょう。ですからイエス様も厳しく叱責していません。むしろ優しく教え諭して行かれます。イエス様の答えは、確かにそのようにわたしに従って来たあなたがたに報いは豊かに与えられるというものです。28節は12弟子たちへの言葉です。彼らはやがての栄光の日に、新しい世界で特別のポジションに就き、神の民イスラエルを治めるようになる。そして29節はすべての信者に当てはまるものです。わたしのために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者はみな、その百倍を受ける、と。これはもちろん文字通りの意味ではありません。たとえばイエス様に従うために父を捨てた人が天の御国で本当に父を100人持つと考えたらおかしいことになります。これは自分にとって父のような大切な存在を、天の御国では兄弟姉妹との交わりの中で100人

も与えられるような祝福を受けるといった意味でしょう。いずれにしるここに言われていることは、この世でイエス様に従うために様々なものを後ろに捨てた人は、やがて計算できないほどの祝福を受けるといことです。永遠のいのちに加えて、これらも与えられるのです。

しかしイエス様はここで一つの警告を語られました。それは30節にある通り、「しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります。」ということです。これに続いて20章のたとえが語られ、最後の16節にも、19章30節とほぼ同じ言葉、「このように、後の者が先になり、先の者が後になります。」という言葉があります。ですからこのたとえはまさにこの真理を表すために語られたものであることが分かります。

そのたとえを見て行きたいと思います。ストーリーはそんなに難しくありません。あるぶどう園の主人が朝早く、働く人を雇うために人が集まる場所へ出かけました。そしてそこにいた人たちと一日一デナリの約束をして、ぶどう園に送りました。一デナリは当時の一日分の給料に相当する額です。その後、主人は9時ごろに行くと、別の人が立ちました。きっと朝早い時間にはここに来れなかった人たちでしょう。その人たちにも、相当の賃金を払うからと言ってぶどう園へ送ります。その後、12時ごろにも、3時ごろにも同じことをします。そして夕方5時ごろの話です。日が暮れるまであと1時間しかありません。その時間にもそこに立っている人たちがいました。主人は彼らに「なぜ一日中何もしないでここに立っているのですか」と問うと、彼らは「だれも雇ってくれないからです」と答えます。すると主人は「あなたがたもぶどう園に行きなさい」と送り出します。

さて問題はその後です。主人はぶどう園の監督に、最後の者たちから順に賃金を払ってやりなさいと言います。夕方5時ごろから働いた人がまず来ます。果たしていくらもらえるかと彼らは期待したでしょう。何と彼らに渡されたのは1デナリでした！信じられない額です。これを見て、最初から働いた人たちは思いました。あの人たちが1デナリもらったなら自分たちはどれくらいもらえるだろうか。自分たちはあの人たちの10倍は働いた。ということは10デナリか。まさかそこまでは行かないだろう。では5デナリだろうか。少なくとも3デナリくらいはもらえるのではないか。そのように楽しみにしながら監督のもとに来ました。ところが彼らに与えられたのも1デナリでした！その

時、彼らは文句を言い始めたのです。11 節の「不満をもらした」という言葉はギリシャ語で未完了過去という時制で語られていますので、継続し、繰り返してそう言い続けたというニュアンスになっています。彼らは抗議しました。12 節：「最後に来たこの者たちが働いたのは、一時間だけです。それなのにあなたは、一日の労苦と焼けるような暑さを辛抱した私たちと、同じように扱いました。」 他人事として聞くと何でもなくても、同じ立場に身を置いてみれば、私たちもこう言いたくなるのではないのでしょうか。最初から働いた人たちは、これでは不公平だ！後から来た人たちが同じ 1 デナリを受け取るのはずるい！と言っています。2 つのことがここに言われています。一つはあの人たちは一時間しか働かなかった。それに対して我々は朝から働いている。10 倍以上働いている。なのにもらう額が同じとはおかしい！ということです。もう一つは我々は 1 日中働き焼けるような暑さを辛抱したということです。夕方 5 時に雇われた人はぶどう園に来た時、もう涼しくなっていたことでしょう。日も傾き、涼しい風が吹く中、1 時間だけ働くことは苦でも何でもありません。その彼らが、1 日中焼けるような暑さの中で働いた我々と同じ額をもらうなんて、あなたのしていることはおかしい！ということです。

これに対して主人は「友よ」と呼びかけながら彼らに答えます。まず言っていることはこれです。「私はあなたに不当なことはしていない。」 確かにそうです。主人は最初の人たちと朝、1 日一デナリの約束をしました。もしこれから減らして渡したら、不当だ！約束が違う！と主人を責めることができたでしょうけれども、主人はそんなことはしていません。「あなたは私と、一デナリで同意したではありませんか」と主人は言います。確かに主人はある人たちには分不相応に賃金を与えました。しかしだからと言って、そのことが最初から働いた人たちに新しい権利を与えることにはなりません。主人は言います。どうして自分のものを自分の思うように使ってダメなの？どうして私のものを使うにあたってあなたに指図されたり、要求されたりしなければならないの？私のものは私のもの。ただ私は最後の人にも同じようにあげたいんだ！

続けてこう言います。「それとも、私が気前がいいので、あなたはねたんでいるのですか。」 これが主人の最後の言葉であることから分かりますように、たとえが強調しようとしている点です。すなわち主人は気前がいいということです。なぜこの主人は 5 時ごろにも市場に立っていた人たちを雇ったのでしょうか。それはその人たちに働いてもらうと助かるから、ではなかったと思います。「なぜ一日中何もしないでここに立っているのですか」と主人が尋ねた時、彼らは「だれも雇ってくれないからです」と答

えました。一日中立っていたのに雇われない。それは彼らの側に何か問題があったからかもしれません。他の労働者に比べて劣る人たち、使えない人々と判断されたからかもしれません。その彼らが夕方5時になってもまだそこに立っていたということは、お金を本当に必要としていたということでしょう。一時間でも働いて給料を得ないとやって行けない。そういう困った状態にある人たちであった。その彼らを見て、主人は彼らをあわれむ心で「あなたがたもぶどう園に行きなさい！」と言ったのです。そして一デナリを渡しました。これは主人の気前の良さ、引いてはこの主人が現している父なる神の気前の良さを現しています。このわたしの気前の良さがあなたがたには妬ましいのですかと主人は言います。彼らの不満足の原因は、一言で言えば嫉妬です。5時から来た人たちも一デナリをもらっていいな～、ずるいな～、ということです。かわいそうだと思う人をあわれむ心を主人が持っているということが受け入れられない。そういう主人はいやだ！と言っているのです。

どう考えたら良いのでしょうか。二つのことを述べたいと思います。一つは今日の箇所理解の基礎となること、そしてもう一つはその基礎に基づく適用です。まず基礎として押さえないことは、このたとえで明らかにされていることは、この世の基準と天の御国の基準の相違であるということです。どう違うのでしょうか。この世では長く働いた人がそれだけ報いを得ると考えます。言い方を換えれば、資格のある人がふさわしい報いを得る。少なく働いた者、または能力の劣る者は多くはもらえない。この考え方の下で、能力がある人、力がある人、富んでいる人が、そうでない者に対して誇るということになります。しかし天の御国は違います。神の前にふさわしい人は誰一人としていません。神に何かを要求できるような権利を持つ人は一人もいません。要求できるとしたら、それはただふさわしいさばきだけです。そんな私たちが神の前で生かされるとしたら、それはただ恵みによるしかありません。ですからすべてが恵みによって成り立っています。このように考え方が全く異なる両者が出会えば、そこには衝突が起こります。イエス様は天の御国を宣教しておられましたから、イエス様の宣教がなされるところではまさにこの衝突が起こるわけです。たとえば取税人や罪人たちを考えてみると良いと思います。彼らの方がイエス様の福音により早く反応し、その救いにあずかるという現象が起こっていました。それを見てパリサイ人や律法学者たちは妬み、イエス様に対して「あの人は罪人たちと一緒に食事までする！」と文句を言いました。イエス様のしていることは恵み深すぎる！と文句を言ったのです。そんな彼らを教え諭して、ともに喜びの輪に加わるようにと招くために語られたのが、あのルカの福音書 15 章の放蕩

息子のたとえでした。あのたとえと今日の箇所のとえは良く似ています。あのたとえで放蕩息子が帰って来て歓迎されます。あの部分だけを読むなら問題はありません。しかしそこには兄が登場します。彼は弟を受け入れる父を見て何と反応したでしょうか。兄は言います。ずるい！ずるい！これは不当だ！こんなことでは今まで一生懸命自分が働いて来たのはばかばかしいことになる。こんなろくでもない弟息子をこのように迎えるとは、あなたはひどい人だ！そのように兄息子は父に対して怒ります。今日の箇所の最初に来た人たちと全く重なりますね。

あるいは直前に見た金持ちの青年にも当てはまります。彼はまじめな人です。私は律法をすべて守って来ました！と言っていました。彼はきっと努力家で、その努力の積み重ねによって金持ちになり、名声を得て、他の福音書では「役人」であったと記されていますから、人望も厚い人だったのでしょう。この世の基準から見れば先頭を走っているような人です。ところがそんな彼がなかなか神の国に入れず、結局は遠ざかって行ったのに、ガリラヤの無学な漁師たちの方が神の国に入っています！これはまさに先の者が後になり、後の者が先になるということではなくて何でしょうか。つまりこれはこの世の基準と天の御国の基準は大きく異なるため、天の御国に入る時には、この世の基準で考えて先にいると思っていた人が後になり、反対にこの世の基準で後ろにいると思っていた人が先になるというびっくりするような大逆転が起こるということなのです。

しかしペテロも気をつけなくてはなりません。彼は今、自分は先を走っていると考えているのでしょうか。それによって多くをいただけると考えているのでしょうか。そのように、自分の働きによって祝福を勝ち取るという考え方をしていると思われぬ落とし穴に落ちるかもしれないということです。天の御国はそういう考えをすることではないからです。

では私たちはどうすれば良いのでしょうか。最後にそのことを考えたいと思います。答えは明白です。この世の考え方はやがて引っ繰り返されるわけですから、私たちは今の内から天の御国の基準あるいは考え方で生きるべきであるということです。その天の御国の基準とは、一言で言えば、ただ恵みによるという原理によって生きることです。私たちが今日こうして生かされているのもただ神の恵みによることですし、私たちが神の国のために与えられている様々な働きも神の恵みです。本来さばきのみふさわしい私たちが救われたばかりか、神の国のためにすべき働きも与えられている。これも恵みで

す。ですからこのたとえで最初から働いた人たちも、そのように考えなければなりません。朝早くから雇ってもらったことは、もうそれだけで恵みなのです。雇われて働くことができたのです。多く働いたから損した！とか、夕方に雇われる方が得だった！というような考え方は神の国にはありません。神の国のための働きは神がくださった恵みです。私たちはそのような視点でもう一度、自分が今日こうして生かされていることと、自分に与えられている働きを捉え直すべきではないでしょうか。私たちはそれぞれ永遠に価値が残る神の国のための働きを何らかの形で与えられているのです。

そしてそのように捉えているなら、他の人が祝福されているのを見ても嫉妬しないはずで、あの人には私より働きが悪いのにと、私の方がその祝福を受けるにふさわしい人間なのになどと考えているとしたら、それは恵みの原理によって考えていないことの現れです。私たちが信ずるべきは、神は私には私に恵み深く関わってくださるということです。19章29節で見たように、主のためにと歩む人に主は100倍もの祝福を約束くださっています。他の人を神が祝福したからと言って私への祝福が減らされることはありません。どのような形で神がこの約束を果たしてくださるのか、そのことは神の最善の知恵にお委ねして、私たちは自分のすることに没頭して行くことが大事なことでないでしょうか。その時、私たちは他の人が祝福されるのを見ても喜ぶことができます。もし誰かが分不相応な恵みを受けているように見えた場合、それは神が寛大なお方であることの現れだと見て、神を賛美すれば良いのです。そしてそのことを良く良く思い巡らせば、実はその憐れみ深い神が、私にも同じようにしてくださっているということ、私たちは色々認められるのではないのでしょうか。このようにして私たちは神が他の人を祝福する姿を見ても、一層心を強くされることができるのです。

神はこの箇所を通して、私たちが神の恵みによって生かされていることを感謝し、またその神の恵みにより頼んで生きるように！と私たちに招いています。もし私たちがこの世の価値基準に立って、すなわち功績によって祝福を得ると考えているなら、最後の日にはすべて引續り返されることとなります。先の者が後になり、後の者が先になります。私たちは神の前でただ恵みを与えられて今日このように生かされており、また恵みによって様々な働きを与えられています。そのことを感謝して、私たちの主の前での生活と働きに当たりたいと思います。他の人に与えられる特別な恵みを見た時も、神が気前の良い寛大な方であることを見て取って神を賛美し、私たちの信じる神はこういう神だともう一度捉えて励ましを受けたいと思います。神は私たちの主のための奉仕に対

して、恵みにより、計算できないような 100 倍もの祝福をくださると言っています。その神を信じ、その神にお委ねして、この神の恵みにお答えする私たち一人一人の歩みをささげて行きたいと思います。